

2016年4月～8月 参画室の活動報告

オープンキャンパスに参加しました

2016年5月14日(土)のオープンキャンパス開催に合わせて、女子大学院生の研究生生活を紹介する小冊子のPDF版を男女共同参画室のURLにて公開し、オープンキャンパス当日は、PDF版のQRコードを付した案内チラシを各研究科受付にて配布しました。

参画室のURLには、4月19日(火)のPDF公開日からの約1ヶ月間に、約300人の方が新規にアクセスし、小冊子をダウンロードしてくださいました。

また、オープンキャンパス当日は、運営に携わる教職員を対象に、大学敷地内にある一時託児室「託児室せんたん」で託児を実施しました。子どもたちは、高山サイエンスプラザのインシュタインの広場までお散歩をしたり、託児室のおセロで遊んだりして、楽しく過ごしました。



『研究生生活紹介
-女子大学院生version』



けいはんな女性研究者ネットワーク 第8回茶話会が開催されました

平成28年6月3日(金) 18時から21時まで、けいはんなプラザにて「けいはんな女性研究者ネットワーク」の茶話会が開催されました。今回は大人12名、6ヶ月の赤ちゃん1名が集まりました。

茶話会当日は、けいはんな地区で「オープンハウス2016」や「スマートシティメッセin けいはんな」が開催されていたので、関西文化学術研究都市推進機構事業推進部にお力添えいただき、これらの催しの参加者にも茶話会のご案内を出したところ、東京からご参加くださった方がいました。参加者のうちお二人が同時期に出産予定ということもあり、各職場で産前産後に利用できる支援制度や復職の現状などについても情報交換をしました。

ランチミーティングを 開催しました

2016年4月5日、5月10日、6月7日、7月5日、8月2日にランチミーティングを開催しました。

ランチミーティングでは、毎回、3研究科の教員や各部署の職員が参加し、ワークライフバランスや男女共同参画室の活動などに関しての意見交換、情報交換をしています。所属も職位もさまざまな方々と交流できる機会ですので、興味のある方はぜひ一度お立ち寄りください。

日時：毎月第一火曜日12:30-13:30
場所：事務局棟1階男女共同参画室



「教職員のワークライフバランスと男女共同参画推進に関するアンケート調査」
分析結果を取りまとめています。

教職員の育児・介護と仕事の両立の実態や男女共同参画に関する意識を把握し、支援制度の充実や職場環境の改善につなげることを目的として、平成28年6月22日～7月1日に全教職員を対象としたwebアンケート調査を実施しました。アンケートでは、育児と仕事の両立、介護と仕事の両立、性別による処遇の差、男女共同参画の取り組みや男女共同参画の活動に期待すること等について尋ねました。対象者数、有効回答率等の速報を以下にお伝えします。

- ・対象者数 693 (常勤教員197,常勤職員158,有期契約職員331,その他7)
- ・回収数 346 回収率 49.9%
- ・有効回答数 268 有効回答率 38.7%

平成28年度中に分析結果の詳細を取りまとめ、ご報告する予定です。

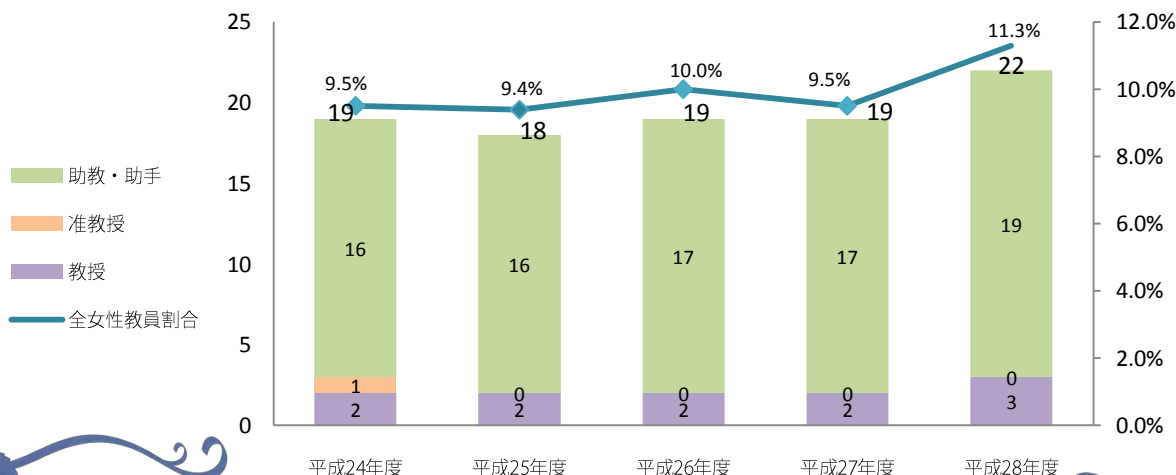
奈良先端科学技術大学院大学
第9回男女共同参画推進シンポジウムを
開催します。

平成28年12月2日に、物質創成科学研究科との共催で第9回男女共同参画推進シンポジウムを開催します。

今年度のテーマは「多様性を受容する社会に向けて～大学院に求められること～」です。シンポジウムでは、国の科学技術推進におけるダイバーシティ戦略、現代・近未来社会に必要とされる人材育成や組織作りのあり方などについて3人の専門家よりご講演いただきます。みなさまのご参加をお待ちしております。

- 日時：平成28年12月2日(金)
- 時間：15時～17時30分(予定) 開場/受付：14時50分
- 場所：奈良先端大 ミレニアムホール
- 内容：以下の講師による講演とパネルディスカッション
- ・渡辺 美代子氏
(国立研究開発法人科学技術振興機構副理事)
- ・中岡 義久氏
(西大和学園高等学校校長)
- ・森田 雅也氏
(関西大学社会学部社会システムデザイン専攻教授)

本学の男女共同参画に関する数字 女性教員(常勤)の在籍割合の推移



コラム

本学男女共同参画室NewsLetter第8号(2011年7月発行)コラム 第3回テーマ「ワークライフバランス」②
当時バイオサイエンス研究科動物遺伝子機能学教授であった川市先生によるご寄稿を再掲

ワーク、ライフ、アン、バランス

川市正史 特任教授
教育推進機構 教育推進部門 部門長

「ワークライフバランスについて書けと言われたんだけど。」
「内閣府のHPがあるから見てはどうでしょう。」
「見たよ。政府の無策を謝るHPかと思ったけど、人ごとみたいなことが書いてあるだけだよ。」
「そもそも、先生達は仕事と趣味の区別がないのでしょうか？寄稿者としては最悪ですよ。」
「そんなことはない。賃金のためにいやいやする仕事もある。そうか！義務でやるのがワーク、好きでやるのがライフ！でもそれだと家族サービスは窮極のワークかなあ。」
「なんということを！」
「あのHPでは、家族友人たちとの時間、自己啓発や地域活動がライフなんだって。でも友人もみな研究者だし、自己啓発も研究の中だけで精一杯だよ。地域の自治会でかり出されるけど、賃金は出ないがどうみてもワークだよ、あれは。留学先の米国人の同僚は6時には帰っていたね。遅いと離婚されるんだって。帰る時はこれから仕事だという顔をしてたよ。」
「なんて人達でしょう！誰かが作ったご飯を食べ、誰かが洗濯した服を着て、誰かが掃除した家に住む限り頭の中が仕事だけでも困らないから、ワークライフバランスについて考えないんでしょう！」
「そうなのだ。こんな原稿を私に依頼する意図にはたとえ気がついた。それは自分が如何に恵まれた境遇にあるか、そしてそれは誰かの労力の上に成り立っていることを自覚すること。世の中には、一日を無事に終えるために常にワークライフバランスを考えなくてはいけない研究者も存在することを思い出すこと。」

NEWS LETTER

女性研究者スタートアップ研究費（教育研究助成）を受給して part5

本学では、優秀な女性教員の採用促進を図るために、新規採用の女性教員の研究立ち上げに対して研究助成をおこなっています。平成21年から平成28年8月までに計23名の女性教員を支援してきました。今回は平成27年7月に着任された物質創成科学研究科の藤井茉美先生と、平成27年9月に着任されたバイオサイエンス研究科の福田七穂先生をご紹介します。

スタートアップ研究費を受給して

受給は、研究室としても有り難かったです。

助成期間中に妊娠していることがわかったため、妊娠前に計画していた実験や学会参加の予定を一部変更することになったのですが経費配分を調整し学生の手を借りながら結果としてやりたかったことをすべてできたのでよかったです。

女性研究者のみを対象とした本研究費を受給することには、正直、抵抗がありました。元々このような制度は知っていましたが、特任からの職責変更で着任する私が助成対象になるとは思っていませんでした。研究費の面で優遇されるということですが、研究のスタートアップ環境に男女の差はないと思っていましたので、他の男性の先生方に対して引け目というか、心配はありました。ただ、制度として頂ける以上、有意義に使わせていただこうと思いました。

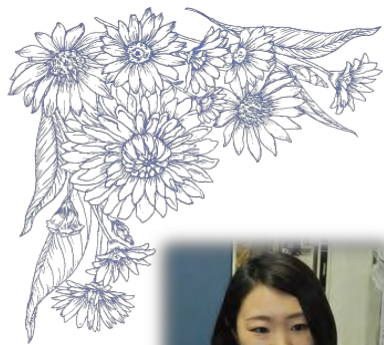


本学には特任助教で1年半お世話になり、助教として着任した際に、ちょうど新しい材料を扱う研究テーマを始めました。私は企業との共同研究費、物質創成科学研究科からの研究費などによって研究を進めていますが、新テーマのためには、研究室になかった装置や試薬を揃える必要がありました。新しい装置を導入すると費用がかさみますが、本研究費によって購入することができ、新テーマの立ち上げを円滑に進めることができました。

私の所属する浦岡研では、「マイスター制度」をとっていて、各装置にマイスターの学生かスタッフを置いています。そしてマイスターから許可された学生だけがその装置を使えるのですが、本研究費で購入した装置は、私が指導している学生だけでなく他グループの学生も使っています。本研究費の

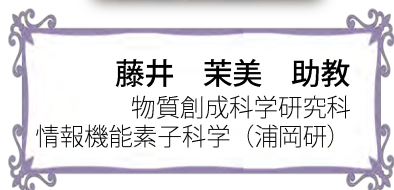
職として製品開発に携わりながら受験勉強をして進学しなおしました。上司にも恵まれていましたが周りの先輩方の応援もあり、途中であきらめるわけにはいかないという思いがありました。

また、高専5年の夏に2週間研究室から休みを貰って、ニュージーランドへホームステイに行きました。この間に、それぞれ目標を持って学んでいるいろんな国の学生と交流したことがきっかけで、もっと大学で学びたいと思うようになりました。この時、新しいものを創造する難しさ、挫折しながらも何かを達成した時の楽しさや新しいことを学ぶ嬉しさを経験したことが、私の貴重な財産になっていると思います。そこで、入社後研究者志望であることを上司に相談し、技術



藤井 茉美 助教

物質創成科学研究科
情報機能素子科学（浦岡研）



なぜ研究者になったのか

私には会社勤めの経験があります。工業高等専門学校卒業後に20歳で電機メーカーに就職しました。会社の内定をもらってから卒業研究に取り組んだので、研究の面白さを知らないままに就職活動をしました。しかし、卒業研究中、自分で新しいものをつくるということに魅了され、将来は研究者になりたいと思いました。

家事育児と キャリアアップの両立

まもなく初めての出産を迎えるのですがどうしても自分のキャリアを心配してしまいます。そして、それと同じくらい子どもにどの程度の時間を割いてあげられるのかという不安もあります。研究のためと家族のため、それぞれにどこまで時間をコントロールできるか。これから研究者としてステップアップしていくにあたって、出産育児で生じる遅れをどうやりくりすれば良いかが今の課題です。幸いなことに、上司を含め理解して応援してくださる方が周囲に多くおられるので、あとは家族の協力と自分の気力・体力があれば試行錯誤しながら乗り越えられると思っています。

私は毎朝6時半くらいに起きて、朝食準備や洗濯などの家事をして、9時までに出勤します。お昼には徒歩3分の職員宿舎に戻って昼食をつくり、夫といっしょに食べて、また研究室に戻ります。夜は夫の予定に合わせて夕飯をつくりに帰っています。そのあと夫は仕事に戻りますが、私は買出しや掃除・片付けなど他の家事をしていますね。家事が終わったら自宅で出来る程度の仕事をします。現在は契約期間に限りがあるポジションなので、自分の価値を上げるために出来る限り努力を重ね、自分にしかできない事を作っていきたいと思います。



研究分野のイメージと女性

私の研究分野では危険な試薬や高圧ガスを使用して実験をすることがありますが、21歳で研究者になると決めたとき、迷いがあったかというところ全くそんなことはありませんでした。自分で選んだことでしたので、それ以降に後悔したこともありません。もちろん女性の人生設計上のリスクはあると思いますが、今でも実験をすることが楽しくて、集中して実験をすることがストレス発散の手段になっているぐらいです。

でも、会社員だった時に所属したチームには200人のメンバーがいましたが女性は私だけでした。それくらいこの分野には女性が少ない。私たちの分野は、女性にとってあまりよいイメージがないのでしょうか。

私たちの場合、実験室に微細なごみを持ち込まないように目しか出ていない真っ白なクリーンスーツを着て実験をし

ますので、おしゃれをしたい女性には嫌がられそうですね。また、大きな真空装置を使うのでメンテナンスの時には力仕事も多いです。真空装置の分解・組立をするメンテナンスは、装置の仕組みを実際に見て学ぶことができるので私にとっては楽しい作業の一つですが、女性向きとは言えないでしょうね。でも、私は実験が料理に似ていると感じていますし、手芸のように丁寧で繊細な作業をするセンスも必要です。料理や手芸が好きな女性にも是非、私たちの分野の研究に挑戦してもらいたいです。

女性という性別をもつことが研究のうえで壁になったと感じたことは、これまでは特にありませんでした。壁かどうかというのは、個人の感じ方次第ではないかと思います。女性のライフイベントに関する制度や環境について言うと、特に会社員時代、私より前の世代が既に道を切り拓いてくれていたと感じました。これは、一部の企業に限られることもし

れませんが、女性の執行役員も既におられていろんな制度ができあがっていました。実際に各制度の利用歴も多く、周囲の理解を得られやすいため、仕事とプライベートの両立がしやすい環境でした。

大学では意識面でも制度面でもダイバーシティに配慮した取り組みに関して、遅いところがあるように感じますので、今はまだ私たちが切り拓かないといけない段階だと思います。

これから研究者を目指す人には、イメージにとらわれずにいろんなことに興味をもって、リスクを恐れず挑戦してもらいたいと思います。



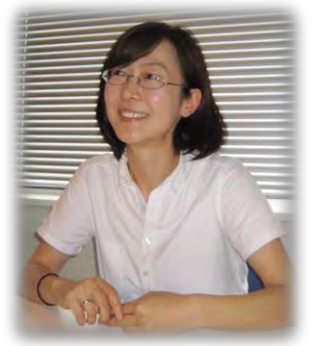
スタートアップ研究費を受給して

平成27年9月に着任しましたが、平成27年度中は他の外部資金がありましたので、本研究費は着任2年目の平成28年度にまとめて使わせていただきました。次年度の見通しがたって、とても助かりました。

私は免疫の研究室で神経系の研究を行っているため、自分で揃えなくてはいけないものも多いのですが、本研究費で自

分のプロジェクトに必要な試薬や機器を購入することができました。

本研究費は、公募情報に記載されていたことから知りました。研究を進めるうえでとても心強いですし、他大学から転任するような場合は、大きな後押しとなると思います。大学が女性の登用に積極的であることを周知して、女性研究者からの応募数を上げる、という点ではとても効果のある取り組みなのではないでしょうか。



福田七穂 助教
バイオサイエンス研究科
機能ゲノム医学研究室（石田研）

なぜ研究者になったのか

もともと生き物がどうやって生きているのかということに興味があって、大学は理学部に進学しました。学部後は、修士課程で研究を少し経験してから就職をしたいと思っていましたが、頂いた研究テーマにとっても興味を持っていましたし、苦勞していた実験系がようやく動き始める頃に修士課程が終わってしまいそうな見通しとなって、その研究テーマから離れたい気持ちになりました。そこで指導教官と相談し、もう少し博士課程で頑張らせてもらうことにしました。

博士課程でも大変なことはもちろんありましたが、進学してよかったと思っています。結果的に、修士課程から取り組んで来たプロジェクトを論文2報にまとめ、学位を得ることが出来ました。指導教官や先輩、同輩に教わりながら実験を進め、結果を論文としてまとめる過程で多くのことを学び、自分なりに成長したと思います。

学位取得後は、理化学研究所脳科学総合研究センターで3年間研究をした後、スウェーデンのカロリンスカ研究所に5年間留学しました。留学中の研究成果は今の研究テーマの元になっていますし、色々な国から集まる人達の多様な価値観に触

れることで視野が広がりました。この留学経験は、現在、私が研究者であることに大きく影響していると思います。



子育てと研究者としてのキャリア

小学校1年生と保育園年中の二人の子どもがおり、夫は他大学の教員です。夫は大学院の同級生で、理化学研究所から、スウェーデンへの留学、本学への着任までずっと同じ研究機関でそれぞれポジションをみつけて仕事をしてきました。しかしながら、平成28年4月に夫が本学から転任し、別々の生活となりました。単身赴任が決まったのは、私が本学の助教の

職に着き、これでしばらくふたりとも同じ場所で落ちついて研究と子育てをやっていけると思った半年後でした。長男が小学校に入るところだったので「このタイミングで？」とは思いましたが、本学の教員としての契約は長くて10年。いつかは移らなくては行けないし、上のポジションを得ることの難しさは知っていたので仕方がないと思いました。飛行機で移動する距離なので夫が帰ってくるのは月に1回程度ですが、スカイプなどで毎日コミュニケーションをとっています。



もちろん、できれば家族は一緒のほうがよいと思いますが、キャリア（年齢？）が上がってくればくるほど、夫婦ともに同じ場所でポジションを得るのは難しいのが現状です。私は本研究費や、参画室のアカデミックアシスタント制度など大学からサポートを受けています。また、研究室の石田靖雅先生も子育てをしながら研究をすることへの理解があります。石田先生は、保育時間外にイベントを入れるのを避けるなど、いつもご配慮下さいますし、先日子どもの授業参観で仕事を抜けるときは、「うらやましいです、楽しんでください！」と言って送り出して下さいました。また、有り難いことに週末に仕事をし

なくてはいけない時や、出張の時は、奈良県内に住んでいる夫の両親が助けてくれます。このような点を考えると、別々に頑張っている他の研究者夫婦よりも私は恵まれた状況にあるのかもしれない。



➡ ワーク・ライフバランスと 研究時間の確保のために

スウェーデンで子ども二人を出産し、子育てをしながらの研究生活を経験するなかで、ワーク・ライフバランスについてよく考えるようになりました。ひとつ日本でも真似をすると良いと思ったことは、システムの効率化です。スウェーデンでは、分業や電子システムの導入によって、研究者の事務的な仕事量が少なかったように思

ます。多くの書類は入力済みのフォームを確認してからサインするだけでしたし、物品購入の伝票も確認のクリックのみ、機器の予約もPC上で出来ました。一方で日本では、書類にわざわざ捺印して郵送しなくてはならなかったり、何回も提出するフォームに一から全部書かなくてはいけなかったりします。こういった面は効率化を図り研究者がもっと研究の時間を確保できるようになれば、ワーク・ライフバランスの向上につながると思います。

➡ 研究者を目指す人たちへ

研究職は、日々努力をして、成果が出ればようやく次のチャンスを与えられるという点で、プロスポーツ選手のような職業です。決して楽な仕事ではありません。特に将来設計が立てづらい点は、子どもを持つと重くのしかかって来ます。その一方で、生命科学の研究は本当に面白いものです。実験で仮説が立証されるような結果が出たらすごく嬉しいし、細胞をきれいに染められただけでも単純に感動します。研究プロジェクトは自分の

子どものように感じられて、遊びに行く時間をとられても苦になりません。このように自分が打ち込めるものを今仕事にできていることに感謝しています。

私は、目の前の研究に取り組んでいるうちにひとつひとつ道がつながってきました。なので、学生の皆さんが、研究職の大変さを分かったうえで、それでも研究に興味をもってしまったら、とにかくのめり込んでみたらいいのではないかと思います。興味を持ったことを研究できるのは、とても恵まれたことです。また、研究は多様な能力を使うものですし、た

とえ将来違う道に進むことになったとしても研究に集中した時間は絶対に無駄にはならないと思います。



アカデミックアシスタント制度を利用して part4

本学では、研究と育児等との両立を支援し、最先端研究の成果の向上に資することを目標として、アカデミックアシスタント（研究技術員）制度を設けています。平成28年度の利用者は10名（女性5名、男性5名）ですが、今回は平成27年度に本学に着任し、平成28年4月より本制度を利用されているバイオサイエンス研究科の笹井先生にお話を伺いました。

○アカデミックアシスタント（AA）制度について

私には小学校5年生と1年生の子どもがおり、平成28年4月よりAA制度を週10時間利用させていただいています。AAの八塚さんは私の研究室の大学院生で、彼には研究室の備品管理などの業務、分子生物学的実験や後輩の指導の補助をお願いしています。

私の研究室では、主にニワトリの卵や培養細胞を用いた研究を行っています。生物学の実験には「絶対にこの時間に細胞を回収しないとイケない」「この時間じゃないと卵の中での成長が進んでしまう」というものがあります。実はこれが子どもをもっているとけっこう難しいのです。例えば12時間の処理を基本とする実験では、朝8時に実験をスタートすると夜8時に、夜7時にスタートすると朝7時に研究室にいない必要があるので、ちょうど子どもが家にいて面倒を見ないとイケない時間にぶつかってしまうからです。また、私の家は共働きのため、子どもが病気になったり学校が休校になれば、特に小学校1年生の子はひとりで家に置いておくことはできず、予定した時間通りに研究室に出て来られない日もあります。AA制度を利用する以前は大学構内の寮に住む学生にボランティア的に作業を頼んだりしていたのですが、本制度を利用することでアルバイト代を対価として支払うことができ、責任を持って作業をしてもらうことができるため、大変助かっています。また、教員である私のスケジュールが乱れてしまうと、学生を指導する上でも研究室内のモチベーションを保つ上でもいろいろと不都合が生じます。そういう意味では、私の不在中の研究室のケアを、補助的とはいえ責任をもって引き受けてくれるAAがいることはありがたいです。

○一日のスケジュール

朝は6時半に起き、妻と協力して朝ごはんを準備し、洗濯機を回して干します。8時前に家を出て職場に向かい、8時すぎから19時前まで仕事をして帰宅します。ただ、子どものお稽古ごとの送り迎えだとか小学校の行事がある日は少しスケジュールが変わることはありますが、小学校は意外に行事があって、とくに今年はPTAの広報委員をしているので会合が定期的であり、できるだけ時間をやりくりして、これらにも出席するようにしています。

夜は、先に帰宅する妻が子どもたちと夕飯を済ませてくれていて、私は子どもたちを寝かしつけたあとに仕事をしています。日中は学生とのディスカッションや実験、学内での会議やミーティングなど、大学でしかできないことを優先しているため、家では



AA 八塚敦輝さん



笹井 紀明 准教授

バイオサイエンス研究科
発生医科学研究室（笹井研）



論文や申請書、メールを書くなどの作業をしています。日によっては夜中までかかるときもありますが、だいたい0時くらいには寝ようと思っています。家事の負担ですが、私はできることはできるだけやろうとしていますけれど、妻は「私のほうがたいへん」と言っています。割合でいうと7対3くらいでしょうか。

○ライフイベントと研究生活の両立

子育てやライフイベントと研究（または仕事）を両立させる上で、**「こうすればうまくいく」というような一義的な解決方法は存在しません。**私の場合、共働きという環境のもとで、子どもが小さかったころは保育所のお迎えのほか、急な病気など予期せぬことが起こったときに、仕事のスケジュールとどう折り合いをつけるかという問題はずっと起こってきました。一方、イギリスで研究生生活を送っている間に下の子が生まれたのですが、妻の出産直後の約2ヶ月間、短時間勤務を認めていただいたため、研究の進展に深刻な影響を与えることなく異国で子育てをすることができました。このような不規則な勤務を認めてくださった当時の指導者にとっても感謝していると同時に、文化の違いこそあれ、日本でも同じような体制がより一般的になればよいと思ったものでした。

本学着任後も、私の家はどちらも実家が遠いために、子育ては夫婦のみでやって行かなければなりません。家庭によっては祖父母の支援が受けられやすいところもあるでしょう。また、子どもの人数や年齢によっても必要なことは変わってきます。スタッフによっては夫婦の一方が単身赴任されていたり、あるいはシングルで子育てをされている家庭もあると思います。私自身はAA制度自体には特に要望はありませんが、個人の事情に応じた支援が、今後確立されて行くことを望みます。

幸い、本学にはシニアから子育て中までいろいろな世代の研究者に加えて女性研究者も多く、異なるバックグラウンドを持った研究者を受け入れる土壌が整っています。そして、これが本学の研究を推進する原動力になっていることは間違いありません。学生たちには多くのモデルケースを目の当たりにし、自身の将来を考える上で何かのヒントを得てほしいですね。また私自身も、本学のスタッフとなった今、これまでの経験を生かして研究の進展だけでなく、研究室のメンバーが自分のキャリア構築とライフスタイルのバランスを保てるよう、環境整備にも微力ながら貢献したいと思っています。